

唯、活ける信仰ある者のみ

眞の宗教々育を爲し得るであらう

——「宗教的情操涵養」に関する答申案に因み、前稿の補遺として——

齋藤善太郎

此の心持はさうしてもお傳へしたいので——云つても別に新しいものでも何んでもありませんが——も一度補遺をさせていただきます。

その前に、今も演習でペスタロッチーの「隠者の夕暮」を読みあひながら

『余の子供が余の手から食ふパンが彼の子ミしての感じをつくるのであつて、彼の將來のために余が夜もねむらずに居るここや、余が心配して居るここに對しての彼の驚きがこれをつくるのではないのである。我が行についてミかく判断し過ぎるのは無思慮のこころであつて、それは彼の心を誤り導き、我れからそうするかも知れぬのである』。

ミいふ所にうたれてゐたのですが、今、補遺をさせていたゞきたいと思つてゐる「心持」ミいふのものに他ならぬのですから、ペスタロッチーの活ける言葉を二三節抜いてみるこころにします。

今抜いたのは、福島政雄氏の譯文で、同氏譯「隠者の夕暮」改訂増補版の一〇六頁から七頁にかけての所であります。そ

ここに來る前には、

『併しながら汝の父が汝の心の奥底において汝の本質を強め、汝のために汝の日々を明かならしめ、汝の耐へ忍ぶ力を向上せしめ、聖福の樂しみの優越を汝自身の衷心において開きあらはすならば、その時汝は神に對する信仰のための自然の教育を享受するのである』。(福島氏譯、一〇六頁)

さういふ所であります。即ち、人よ、若しお前のお父さんが、何もおつしやらずとも然し何時もお前の心の中にあるお前をほんまに元氣つけて下さり、お前にいそいそ楽しい日を持たして下さい、お父さんのこころを思へばどんな困難が若し來ても勇敢に忍耐してゆくやう心のざんごから力をつけて下さり、そして、お前の心のざんごの方で、お父さんのこころを思ひお父さんに力づけられるさういふさ、ほんまの幸福感に得も言はずに満されて、昂然たる意氣を感じさせられる、さういふこころが分らせられる、さういふ風にお父さんがして下さいさるならば——そして實際お父さんは然うして下さるのだが——然うすれば、人よ、お前は、おのづからお前の本性が育つて、やがて神、父なる神を信ぜざるを得ざる、其の悦びを味はざるをえないのだ、「親の「子」にして、「親心」に包まれてあれば、「子心」はおのづから目覺めて、「親」の懐の中に暖かく、安らかに、かき抱かれてゐるこころに氣つき、且つ其の悦びにひたらざるを得ないのである——福島先生の本についてる原文、其の八頁の所を開きながら、親しくペスタロッシーに聽く心で讀みかへしながら辿つてみた心持は——福島先生の心こめなすつた譯文を通じて、原文の心持に尙親しく接していただかなければならぬのでありますが——略々此の様でありました。かういふ節が有りまして、其次に前に引いた節が來るのであります。随つて、前から度々繰返して來た言葉によります、宗教々育は物言はぬ「行」によつてなされるので、「言」によつてはなないさういふ事になるのであります。即ち、親から心こめた暖かい御飯を頂いてゐるさういふさ、それで子の「子心」が「親心」に觸れ醒めて來るのであつて、頭で、

親はあんなにも私の爲苦勞して、下さる、さういふやうなことが分つたりするこゝによつては、然ういふ「頭」の判断なきは却つて子心を迷はせるものである、「頭」でなくて、活ける「こゝろ」である、其れこそ子をして「子心」、したがつて「親心」、従つて親心そのもの、「神」に迄目覺めゆかしむるものである、さういふのであります。ですから直ぐそれに續けて「單純に無邪氣、感謝と愛に對する純粹の人間の感情こそは信仰の源泉である」。

さういふ節があります。眞の「親」が、如何に子に、「子心」を目覺させつゝあるか、親心なき親、親心なくして徒らに親切を分らしてゐるのみの教師が、如何に「子心」を迷はしてゐるか、省りみて直に、自ら肌を粟する感がございます。(福島先生の譯文は、初め「教育思想精華選」第一編の方から引用したのですが、其れの改訂増補版が最近出ましたので、其れによつて引き直しました)。

一、「信」か「行」か、しかし「信」「行」を超えて、かなたに、其れの

淵源がある、そして其の淵源より出づる生命のみ人を動かす

さて「此の心持」でありますが、かねがね、いつも尊敬を感じてをります梅原眞隆氏の個人雜誌「道」第百二十四號に、氏を中心として開かれた、宗教と教育との關係についての座談會の記事が出てをりましたが、さすがに私は其れに打たれて、「此の心持はさうしてもお傳へしたい」と思はれましたので、それに、かたく、此の雜誌は相當古くからのものながら、一般の人々の眼には割に觸れないものだらうとも思はれまして、さう思へば思ふほご、宗派の何れを問はず、こんなに素直に、またこんなに眞剣に述べられたものは、是非お傳へしておかねばならぬ、と思はれまして、此の補遺の筆をこりはじめたのであります。

此の座談會は主として初等教育の實際家達によつて、いろいろ敬虔な心持で梅原氏に——たぶん此の記事の中の「A」に
いふのが梅原氏でせう、普通の座談會の記事と異つてこんな風に、質問者應答者の名なきが、唯單なる符號にされてゐて、
「人」が隠れて「法」が出てゐるこいふやうな趣も、意味深いことだと思ひます——其のAなる梅原氏に、葛藤を持出すやうにし
て尋ねながら、其れを解いてもらふ、こいふ形で進んでをりますが、最初の人B氏が、『では私からお尋ねいたします、信仰と
實踐との關係について……解つた様な心地も致しますが、叔實踐となるに、さうも口火が切れない心地が致します、云々』と
尋ねてをります。こゝには、何んかして教育者として宗教的信念乃至迫力を以てやりたいのであるが、さうも自分には其
の迫力、其の迫力の根本が未だしつかりしないやうであるが、一體宗教に於ては信の方が大切なんでせうか、行の方が大
切なんでせうか、こいふやうな心持が在るやうであります。其れに對してAの梅原氏は答へてをられるのであります。

『それは誠に味はひの深い問題であります。實踐、こいふ言葉を行—行爲の上に表す——こいふ事にしますと、宗教が信か行
かは可成り深い問題となります。が結局、實踐を超えた世界に吾等の體驗する深いものがあり、それが信であります。
我々の思想や行爲に表現し得ない、深淵がそこにあります。それが宗教の一番有難い、且つ深い所でありませう。さう
なるに彼が如何に實踐するかよりも、その人がどんな深さを、生命として持つてゐるか、問題でありませう。素人論か
ら言へば、實踐に出ぬ信心は何になるかと言ひますけれど、思想や行爲に表れぬ程深い所に、何かあります。で行に
直接觸れずに行の先驗態としての信を深める事が肝要であります。』で私は實踐々々三八ヶ間しく云ふよりも、實踐
せずに居れぬ信の世界に早く這入る事が大切であると思ひます。更に茲に注意すべき事は信を深めるに云ふ事は行をお
ろそかにするに云ふ事ではなく、信を深めたら行となり、行をひき締めてゆくに信が深まる様に出来てゐる。両者は生命
の具體化であつて決して對立的なものではない。云々』

まことに有難い御教へであります。尊敬する方のものを、所々切つたり抜いたりして、まことに心苦しく存しますが、其の御答の中には、『人を集めて禮拜を命じ、下駄をそろへさせる。よい事ではあるがやるものが自分の實力に相應しない形を真似る。此處に嫌味が出る。その人の行爲が分裂してゐるからである。内側の信を培ふ事を忘れてゐるからである。藝術的な眼を持つた人が見る。その行爲には破綻が見える。』といふやうな所もあります。

實踐を超えた所、そこに、思想や行爲に表現し得ない、宗教の深淵が在る

其の深淵が命、宗教の命である、そこから行はおのづからにして流れ出づる

此の命の流れにしてはじめて、おのづからに人を動かす得る。

かうして梅原氏は、此の座談會の最初に先づ、宗教と教育との關係の根本問題を教へてくれるのであります。

さうするにB氏は其れを受けて、自分は偶々教育者たる者は斯くあらざる可らずといふ意識の強い境遇、「師範學校に勤めてゐるので、つい外形上の事が問題になるのでせう、云はれるのに對して、梅原氏は、

『私、かう思ひます。一體人を教へる事は自己を完成してからの事だとの觀念を打破すべきでせう。…多くの悩み、多くの疑問を持てる人こそ教育者として最も適しい人ではあるまいか。私は自分の子供にかう云つてゐる。私達はつまらぬ兩親だ。私等の缺點をお前達は繰返すな。だがお前等が美しくのびるために役立つ所があつたら取り入れて呉れ。かう云ふ子供自身が相當に批判してきり入れてくる。…まにかく今後の教育者は求道者でありたい。自らを活かす事が自ら人を活かす事になります。大學でも疑問を以てコツ／＼と眞面目に研究する人が生きた教授、尊敬すべき學者です。云々』。

即ち、

眞に命を求めつゝある人、かの深淵に溯りつゝある人、然うすることによつて其の命の流に生命を與へられつゝある人、かゝる人にしてはじめて、宗教なら宗教へと、他をもさそひゆき得る人であるといふのであります。

二、生ける信念、信仰を打ち出せ其れを措いて宗教々育への道は無い

B氏は更に尋ねてをられます、『私は自分の信仰を學校で打出してゆきたい。が此は現制度では許されぬ』。如何すべきか、といふのであります。これは、殊に、眞の宗教々育は何らかの活ける信仰、若しくは特定、宗教即ち基督教なら基督教、佛教なら佛教といふ風に何らかの歴史的、宗教に結びつかねばならぬ、といふことを體驗してをられる人には、現在大きな問題を提出してをります。それで梅原氏も、『これは大きな問題です。現在までの状態では、日本の教育界に、宗教を取り入れてよいと言ふ動向は大體決定して來ました。唯今の問題は、然らばどんな形式でこれを取り入れるか云ふ事でありませぬ』。といきうけられて、しかも『これはあなた方教育家に、私共からお伺ひしたいと思つてゐるごことです』。云はれながら、

『劃一な形を取つて宗教を教育に取り入れるといふことは果してさうでせうかね。元來宗教位個人的なものはない。外から形式的に規定されても、内心の信のあらはれはさうしてもたしなめぬものがある。したがつて又、内部がさうなつてゐないのに外部から宗教を強るごは許されぬごです、同時に劃引するごも許されませぬ。所が多く宗教には宣傳したり強ひたりしてゐるのがあります。これは少しあわてゝをります。さりてまた必ずしも遠慮してをるべきものでもありませんませぬ』。

「先づ梅原氏は、**嚴**して動かぬものを内に潜められながら答へはじめてをられます。眞の信仰、其れは「割引すること」は許されない、しかし又「あわて」強ひたてるべきものでもない、「遠慮」なごしてをれぬ、打出さずにはをれぬ、しかし、あわてなくても太陽の光は必ず嚴水をも破る、こいふ趣であります。ですから次の御言葉が來ます。

『だから結局、如何に取り入れるかの實踐問題としては、各人の宗教的自由を各人の上に許すことではあるまいか。…これ以外に教育に宗教を取り入れる餘地はありませんまい。劃一的に合掌さか、ありがたい心さかこんな抽象的なものばかりを取り入れるこいふことは結局大した効果はあるまい。…無論そこには現制度の如き状態では大きな争闘が起る、反抗も賛成も起るであらうが、仕方がない。だが同時に其處にこそ生命ののびる道がひらけて來る。又こゝにためらひがあるのであるが、然し、此位の生きた手法を持たねば、人形は出來ても、魂のある人間は作れぬものではあるまいか。』
實に打たれる御言葉であります。殊に、いつも、もの靜かに、もの柔らかに語らるゝ梅原氏の、種々謙遜の辭をはさみながらも、嚴して打ち下さるゝ打開の御言葉だけに、そしてまた、宗教に教育に長い間の精進を重ね々々してきてをられる方の御言葉だけに、我々は先づ謹して拜聴しなければならぬ御言葉であります。『現状では宗教的情操なき、いふセントメンタルなものになつてしまつてゐる。そんな命の無いものではごうすること出来ない。』

『はつきり具體的なものを打ち出して行かねばならぬ。児童を叱るまきにもほめる時にも、幼い子供の前に教師の信念を自由の大膽に打ち出さねばならぬ。その人の抱いてゐる宗教的信念がその中に動いてゐなければならぬ。云々』
即ち、

生ける信念、信仰を打出せ

こいふのであります。若し之が例へば文部省さか縣學務部さかいふやうな所で主催して開かれた宗教々育會議であつて、

そこで、此のA氏の梅原氏のやうな意見を出されたら、ずいぶん論難がやかましいことでありませう、其れも尤もな事でありませう、そこには多くの問題が―しかも机上や談話では直ちには解けぬ多くの問題―が潜んでゐることです。すから、論難論議は當然出べきものでせう。しかし、それはそれとしても、「生ける信念、信仰を打出せ」、其れを措いて實踐への道は無い、こいふ根本原理は、我々の過また了了解せねばならぬものである、と思はれます。

三、宗教々育にたづさはる以上、身を以て己が信念信仰を打ち出せ、

しかも權威と責任とを以て

D氏は、尋ねてをります、『例へば食前に一定の宗教的儀式、作法を定めて、それをやつてからでないか食事させぬ様に子供に習慣づけることは、如何でありませうか』。梅原氏は其れに對し、確信をこめて、

『いゝでせう。これは強る言ふ以上、強い親の確信と責任感からなされてゐる時には、敢てビク／＼しなくてもよいでせう。だがそこには、両親の方に餘程強い信念と常に深い反省があることが床しいこととせう』。

またD氏が、學校の圖書室に宗教的圖書を入れることや、『教師が生徒に讀んで聞かせる場合』などに就いて尋ねてをられるのに對し、

『その學校の折り合ひが破れぬ場合はよいでせう。だがそれから生ずる色々な副作用に對し、その教師はあくまで責任を負ふ覺悟が要りますね。選擇の上にも同様です』。

と答へてをられます。即ち、

信念、信仰を打出す以上、全生命的であれ、生命をうちこみて權威あるものたらしめよ、したがつて、

そこより生ずる一切の責任を身を以て負擔せよ

さいふのであります。

そして其れに伴つて、こんな問答もあります。尋ねるのは同じD氏で、『私の學校は殆んど全部が眞宗の子供ですが、彼岸の午後あたり自分も寺に參詣し、希望者はつれて行つては如何でせうか』。さいふの對して、

『色々の副作用を考へるこゝが必要でせう。特に取り殘された少數の子供のさみしさは餘程慎重に考へねばなりません。い。積極的に働きかけるよりも、自分一人が黙つて詣つてゐる内に、來るものが自然に増して來るさいふ様なこゝがありがたいのではありませんか』。

さA氏の梅原氏が答へてをられます。「愛す」を云ひつゝ、此の「さみしさ」を、「取り殘された」小さき柔らかき心のうへに餘りにも屢々影をさして居るこゝを思へば、まことに、なつかしくも有難い、また力強い御言葉であります。

四、「人」よりも「法」、いな、唯「法」のみ、法を高く掲げよ、法を仰げ

さしあたつて「御傳へしたい」を思つた事柄は大體以上のこゝであります。事柄のほかになほ心持があつて其れがなほ殘つてゐますから、全部さはいはぬにしても二三なほ、梅原氏に聴きながら、御傳へしてゆきます。

以上の所で、おのづから「人」が大事なのである、即ちA氏の他の所の言葉を借りますと、『一般に學校が宗教的であること云ふ事は、宗教の時間が何時間あること云ふ様な事ではなくして、事實の背後に必ず宗教的の教師が存在してゐるさいふ事でせうね』。さいふになるのでありますが、其れに關して、

『……それから今「人」の問題が出ましたが、……宗派では人よりも「法」を選ぶこゝが大切ですね。……最も大事なこゝ

は、教への形を教權的にはつきり決定することです。「この人を見よ」といつても人はつきりわからぬ場合があるが「此の法を見よ」とはつきり打ち出すこと、これなら萬人に價値がわかります。法を打ち出すことが大切です。人は三千年に一人しか出ない、然し法は千古に光つてをる。人に就きて信を立てず、法に就いて信を立てるのが安全です。云々」

此の事は、今其の問題に深く這入つては行かないことにしますが、大切なことでもあります。相當宗教々育なきに理解のある人―若しくは或る度まで相當分つてをられるからこそ云へますが―然ういふ人に於て、屢々こゝに謂はゆる「法」、若しくは宗教の形而上學、または神學、教説等が、却て疎かにされることがあります。信、活ける信、仰を傳ふる代りに、死せる知識、化石して唯不備なるのみの物語を説きすぎるのに對して、いはゞパンを求むる者に石を與ふるやうにして所謂道を説くことに對して、それに飽き足らずして活ける「人」を強調したかういふ結果に對しては、無理からぬことを十分認めはしますが、しかし、「法」が、又其れの現れとしての「經典」が疎かにされては、絶對にならぬのであります。「法」こそが千古に光つてゐるのであつて、それが人を通じ、また人に於て、現はれますが、しかし「法」がそこに、現はれるのであつて、法をよし人格的、そして特徴づけるにしても、法は法であつて、正に「此の法を見よ」を掲げらるべきものであります。

五、「人」以上の「活ける御力」あり

或る人が、さうも自分達みたい近代的教育を受けた者は、宗教講話を拜聽してゐる間はいゝが『いざ教壇に立つ』なること、色々の問題にうちあたつて、皆こわれてしまふ』のであるが、何か良い一般的方式でもいふやうなものが有りませまいか、と尋ねてゐるところがあります。其れに對して、

『……宗教の世界に近道は有りませぬ。貴方の眞劍さ以上の、大きな力がありまして、これがたえず働きかけてゐますの

で、いつかきつゝ時が來ます。……よく明師がないから信心が得られぬなぞ、言ふ人がありますが、先徳以上の人物が現代も出てゐるか知れませんが、これを見出すこちらの眼がつぶれてゐます、そこになるに謙讓になることです。……法界は、きつゝ私が救はれねばならぬやうに出來てをります。宗教に近道はない、奥の手はない。結論や近道をきくのは一番の怠者です。云々。』

三梅原氏は答へてをられます。頭の上げられない感じのする、それで、ひびくなつかしい感じのする御言葉であります。ぬきながら自ら傍點を打たずをれませんでした、殊に、『法界は、きつゝ私が救はれねばならぬやうに出來てをります』、こは、何んこいふなつかしい、嚴かな言葉でせう、梅原氏のよくおつかひになる詞によれば正に「ほればれ」を聞き入り、想ひ出さるゝ言葉であります。

六、眞に信仰ある者のみ、生ける宗教々育をなす

終らうとするあたりは、いろ／＼論もあつたらしい後ながら、さすがに、もの靜かな、星の徹する秋夜こいふやうな感があります。考へたり、論じあつたりすれば、いろ／＼私達の足元は亂れようとする、然し、大いなる暖かき御手の中に我々はかき抱かれてゐる、『思ひ切つて逃げやうとして見給へ』、逃げられるかどうか、これから此の會果てゝ歸る時、『星の下で考へて見たまへ、探すのでなくて探されてゐるのでないか』、こいふやうな、梅原氏一流の御言葉があります。結局、眞に信仰ある者のみ、生ける宗教々育をなす

こいふこゝになります。

(勝手に拔書きさして頂いたことを、心苦しくまた有難く、「道」に感謝いたします。先日、昭和十年十月二日、文部省宗教々育協議會に於て「宗教的情操涵養に關する答申案」のなされたことを想ひながら、京都招魂祭の日)。